（別刷）

福祉教育用ビデオの教育効果に関する研究

――「親子で学ぼう　ユニバーサルデザイン」視聴者の感想文から ――

蓑輪 裕子　成瀬 光一　大倉 正臣　長田 由紀子
大根 静香　亀崎 路子　横井 雅代

生涯学習研究
―聖徳大学生涯学習研究所紀要―
第9号　別刷
2011年3月

福祉教育用ビデオの教育効果に関する研究
―「親子で学ぼう　ユニバーサルデザイン」視聴者の感想文から―

蓑輪裕子・成瀬光一・大倉正臣・長田由紀子・大根静香・亀崎路子・横井雅代

1．研究の目的

我が国では，急速な高齢化に対応し，また，障がいのある人々が豊かな地域生活を送れる共生社会を実現するため，福祉のまちづくりの推進が急務となっている。ここでまず始めに，福祉のまちづくりとは何か，その内容を改めて確認しておくが，福祉のまちづくりの原点は，仙台市の一人の障がい者とそのボランティアが中心となり，昭和 51 年に「福祉のまちづくり市民の集い」を発足させたことにあると言われている[1)]。この時には，二人を中心として多くの市民が協力し，市内の施設を調査して，車いす用のトイレやスロープの設置を行政に働きかけた。つまり，福祉のまちづくりの重要な柱は，物的環境のバリアフリー化だと言える。しかし，整備された環境が使いやすい形で維持されるためには，バリアフリーのまちづくりに関する周囲の理解や協力が欠かせない。たとえば，せっかく歩道に点字ブロックを敷設しても，その上を人や物が占領してしまっては意味を成さなくなってしまう。このため，国土交通省が制定した福祉のまちづくりに関する法律，「高齢者，障害者等の移動等の円滑化の促進に関する法律」（平成 18 年）[2)] でも，物的環境のあり方に関わる事項と合わせて，人々の理解の促進，いわば心のバリアフリーの促進に関する内容が，国民の責務として盛り込まれている。また，国全体の動向としては，内閣府が「バリアフリー・ユニバーサルデザイン推進要綱」[3)]を作成しており，内閣府，厚生労働省等，関連各省庁で，障がい者等が暮らしやすい福祉のまちづくりの実現に向けて，幅広い取り組みを進めているところである。

つまり，福祉のまちづくりには，物的環境の整備という側面と，高齢者や障がい者等の気持ちや生活を理解し，バリアフリーのまちづくりに協力できる人々の育成という，心や態度に関する側面があり，福祉のまちづくりの普及には，この両者の推進が欠かせない。また，物的環境の整備については，国や地方自治体あるいは民間の事業者等が，予算の制約の中で計画的に実施していくものであるが，理解のある人々の育成については，すべての国民に関わる事項であり，一人一人の意識をどのように啓発していくのか，国をあげて取り組むべき課題といえる。

さて，福祉のまちづくりに理解のある人材を育成するためには，実際に街のバリアフリー化の状況を見学したり，障がいのある人や高齢者等から日頃の生活に関する話を聞くことが欠かせない。しかし，ゆとり教育が見直され，総合的な学習の時間が減少している学校現場では，福祉教育にかける時間も減少していると考えられる。また，小・中学校には福祉教育を専門にしている教員がいないため，福祉教育の推進校等の指定を受けない限りは，福祉教育がほとんどなされない状況が懸念される。そこで我々の研究グループでは，効率的かつ一定の質を保った福祉教育を実践

表１　親子で学ぼうユニバーサルデザインビデオの内容

1 章　子どもたちの体験編（20 分）
1-1 親子で学ぼうユニバーサルデザイン / 高齢者擬似体験
1-2 車いす体験をやってみよう！
1-3 白杖の体験をしてみよう！
1-4 目の不自由な方にインタビューしてみよう！
1-5 目の不自由な方のガイドをしてみよう！
1-6 盲導犬の歩く様子を見てみよう！
2 章 さまざまなユニバーサルデザイン　知識編（19 分）
2-1 バリアフリーとユニバーサルデザイン
2-2 いろいろなユニバーサルデザイン / 建物のユニバーサルデザイン
2-3 駅のユニバーサルデザイン
2-4 バスのユニバーサルデザイン
2-5 河川敷のユニバーサルデザイン
2-6 住宅のユニバーサルデザイン
2-7 道具のユニバーサルデザイン
3 章 わたしたちにできること　実践編（3 分）
3-1 市民ボランティアと「人にやさしいまちづくり」

※注　本ビデオは，平成 17 年～ 21 年度　文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業（社会連携研究推進事業）「連鎖的参画による子育てのまちづくりに関する開発的研究」（研究代表者　聖徳大学副学長　松島鈞）の一環として制作された。

するために，福祉教育用ビデオ「親子で学ぼうユニバーサルデザイン」を制作した（表1）。ビデオによる学習は，子どもたちが興味を持ちやすい上に，教員にとっても簡単に取り組めるため，普及しやすいと考えられる。また，ビデオの内容に，街中のバリアフリーの現状や，障がいのある人が街中で困ること，手伝ってほしいこと，疑似体験等を織り込むことで，実際の体験に近い効果が期待される。本研究では，学生にこの福祉教育用ビデオを視聴してもらい，その感想を分析することで，ビデオ視聴の効果を把握することを目的としている。

2. 福祉教育の評価と本研究の位置づけ

幅広い市民のための福祉教育の変遷や先進例をまとめた「市民福祉教育の探究」（阪野）[4]によると，市民のための福祉教育に関しては「評価研究が必ずしも活発だったとはいえない」とある。その理由としては，地域性や住民の生活実態，意識等によって，福祉教育の内容や方法は異なるため，客観的な評価が難しいとされている。しかし，より質の高い教育活動とするためには，既存のプログラムを評価することは不可欠であり，評価の側面として，以下の三つ，すなわち，①条件整備に関する評価，②内容や方法，形態等に関する評価，③成果に関する評価，があげられている。またこのうち，③の成果に関する評価，具体的には，何をどう身につけ，意識や態度，行動がどのように変わったかを見定める，ことを目的とした評価が重要とされている。

学校における福祉教育の評価に関しても，「体験的な学習の効果等を測定するために必要とされる評価手法に対する意識がそれほど高くない」（伊藤）[5]と考えられており，だからこそ，今後は客観的な評価実践が必要という認識の基に，さまざまな評価研究の蓄積がなされているところである[6]。たとえば，日本版カリキュラム評価のためのチェックリスト（根津）[7]では，カリキュラム全体を評価するための評価項目が14にまとめられており，成果に関するものとして，「7（結果）このカリキュラムの結果はどうだったのか？またそれをどのように把握したのか？」の項目がある。

本研究の目的は，当研究グループが作成した福祉教育用ビデオの視聴効果を具体的に把握するもので，先述の阪野の分類では「③成果」，根津の分類では「7 結果」に位置づけられる。

ビデオの制作にあたっては，既存の福祉教育用ビデオの視聴会等を開き，本学学生や市民等に，新たにビデオを作る際はどのような内容が好ましいか，アンケート調査を行った[8]。ここであげられた意見としては，「障がいのある人はどんな場面で困っており，どんな援助を望んでいるのかを紹介する」ものが多く，「子どもから大人までわかりやすい内容に」，「生活の細かい様子も入れるとよい」等の意見もあげられた。そこでこれらを考慮した上で，福祉のまちづくりのハード面（建物，駅，車両，住宅，品物のユニバーサルデザイン等）に関する基本的な知識が得られるよう，ハード，ソフトの両面を含めたビデオ構成とした。ただし制作前は，ビデオ視聴後にどのような力を身につけてほしいか，厳密な検討を踏まえたわけではなく，「福祉のまちづくりのハード面，ソフト面の知識を身に付ける」といった大まかなテーマ設定しかしていなかった。そこで本研究では，視聴者がこのビデオを見ることでどのようなことを感じ，どのような知識，力が身についたのか，具体的に把握する。本ビデオの視聴効果については，視聴前後の児童の意識の変化について，すでに報告[9]しているが，この際は視聴人数が12人と少なく，選択肢も限られていた。そこで今回は，気付いたこと，わかったこと，感想等を自由に書いてもらうという形式で，意識の変化の全体像を把握することを目的とした。

なお，成果の具体的な例としては，学習者の変化・変容に関する8項目があげられている[4]。すなわち，①興味や関心の喚起・拡大，②知識や理解の拡大・深化，③意識や意欲の形成・変革，④態度や行動の形成・変容，⑤技術や技能の取得・向上，⑥思考力や論理力の獲得・伸長，⑦学習者相互の意思疎通や友好関係の促進・深化，⑧学習成果の日常生活への具体化・実践化，である。そこで本研究では，これらの変容に関する項目を踏まえて，これらの項目との相違を考えてゆくものである。

表２　視聴した学生の所属

児童学科	
社会福祉コース４年	36 人
社会福祉コース３年	29 人
児童心理コース３年	5 人
児童心理コース１年	28 人
生活文化学科　３年	9 人
その他のコース３年	17 人
合計	124 人

3. 研究の方法

本研究グループで作成した，「親子で学ぼうユニバーサルデザイン（以下，親子 UD ビデオ）」を本学学生が視聴し，感想文を記述した。その感想文の内容を分析し，ビデオ視聴を通じてどのようなことを学び，感じたのかを把握する。これにより，「親子 UD ビデオ」を利用した福祉教育の効果を明らかにする。

なお，感想文の分析にあたっては，フリー・ソフトウェ

アの「KH Coder」[10]を用いて，使用されている用語を定量的に測定したほか，定性的な分析を深めるために，KJ 法[11]を用いて，記述された内容を分類・整理し，全体像を把握した。ビデオを視聴した学生は，本大学児童学科，生活文化学科の 1 年～ 4 年生，計 124 名で，いずれも社会福祉あるいは，障害福祉に関する授業を受講する学生である（表2)。感想文の記入にあたっては，特に細かい指示はせず，ビデオを見ながら，あるいは見終わった後で，A5 サイズの用紙に自由に記述してもらった。ビデオを視聴した日は，2006 年 11 月 14 日，18 日である。

4. 感想文の記述の内容

(1) 用語の出現回数

感想文の中で用いられた用語を定量的に把握するために，先に記した定量テキスト分析のソフトウェア[10]を用いて，用語の出現回数を調べた。その際，たとえば，「高齢者」「お年寄り」等，同じ意味を表す用語については，いずれかに統一した。

出現回数を多い順に表にしたものが表 3 である。動詞では，「思う」83.9%，「分かる」49.2%，「知る」44.4%，「見る」41.9%等が多く，名詞では，「人」52.4%，「バリアフリー」45.2%，「障がい者」39.5%，「ユニバーサルデザイン」37.9%，「街」36.3%等が多い。

感想を記述しているため,「思う」が最も多いのは当然として，その他,「分かる」,「知る」といった，理解や知識の習得に関する用語が多い。これに類似する用語としては，他にも，「出来る」35.5%，「理解」12.9%，「勉強」11.3%，「気付く」8.9%等の用語が用いられている。

バリアフリーやユニバーサルデザインの具体的な内容に関連する用語も様々なものがあげられており,「点字ブロック」33.9%,「段差」16.1%,「音声」10.5%等がある。また，建物や乗り物としては，「駅」21.0%，「バス」10.5%，「住宅」7.3%，等があげられており,「松戸」16.1%といった地名も多くあげられている。

表 3　用語の出現件数および出現回数

No	用語	件数	回数	%	No	用語	件数	回数	%	No	用語	件数	回数	%
1	思う	104	275	83.9	31	持つ	23	31	18.5	61	多い	14	14	11.3
2	人	65	132	52.4	32	普段	23	24	18.5	62	何気ない	13	14	10.5
3	分かる	61	96	49.2	33	考える	22	27	17.7	63	声	13	14	10.5
4	やすい（非自立）	57	88	46.0	34	少し	22	26	17.7	64	音声	13	15	10.5
5	バリアフリー	56	78	45.2	35	実際	21	30	16.9	65	バス	13	17	10.5
6	知る	55	91	44.4	36	工夫	21	26	16.9	66	改めて	13	13	10.5
7	見る	52	67	41.9	37	気	20	22	16.1	67	普通	12	14	9.7
8	障がい者	49	86	39.5	38	松戸	20	23	16.1	68	増える	12	13	9.7
9	ユニバーサルデザイン	47	61	37.9	39	段差	20	22	16.1	69	身近	12	12	9.7
10	街	45	67	36.3	40	沢山	20	20	16.1	70	気持ち	12	14	9.7
11	出来る	44	63	35.5	41	子供	19	24	15.3	71	人達	12	21	9.7
12	点字ブロック	42	66	33.9	42	様々	19	24	15.3	72	説明	11	11	8.9
13	ビデオ	42	59	33.9	43	不自由	19	20	15.3	73	出る	11	13	8.9
14	障がい	40	62	32.3	44	住む	18	23	14.5	74	盲導犬	11	14	8.9
15	車いす	39	53	31.5	45	今	17	18	13.7	75	にくい（非自立）	11	12	8.9
16	良い (非自立)	38	44	30.6	46	便利	17	23	13.7	76	気付く	11	13	8.9
17	良い	37	48	29.8	47	乗る	17	20	13.7	77	沢山	10	13	8.1
18	視覚障がい者	37	53	29.8	48	色々	16	16	12.9	78	建物	10	12	8.1
19	体験	35	52	28.2	49	福祉	16	21	12.9	79	機会	10	10	8.1
20	感じる	32	36	25.8	50	困る	16	17	12.9	80	健常者	10	17	8.1
21	歩く	30	42	24.2	51	理解	16	16	12.9	81	社会	9	14	7.3
22	自分	30	41	24.2	52	場所	15	17	12.1	82	内容	9	9	7.3
23	大変	30	42	24.2	53	自転車	15	15	12.1	83	高齢者擬似体験	9	9	7.3
24	目	28	39	22.6	54	初めて	15	18	12.1	84	住宅	9	13	7.3
25	言う	28	42	22.6	55	見える	15	20	12.1	85	全て	9	10	7.3
26	生活	27	42	21.8	56	道	14	20	11.3	86	視覚	9	10	7.3
27	駅	26	34	21.0	57	勉強	14	18	11.3	87	環境	9	12	7.3
28	高齢	26	32	21.0	58	驚く	14	17	11.3	88	杖	9	11	7.3
29	使う	24	33	19.4	59	利用	14	16	11.3	89	付ける	9	9	7.3
30	大切	24	28	19.4	60	聞く	14	15	11.3					

（注）以下の用語は、それぞれ最初の用語に統一した。高齢者＝老人＝お年寄り、住宅＝住居、良い＝いい

次に，人や人をサポートするものとして，「障がい者」39.5%，「車いす」31.5%，「視覚障がい者」29.8%，「高齢」21.0%，「盲導犬」8.9%等があげられており，ビデオを通じて，これらの対象について学んだことがわかる。

評価に関する用語としては，「・・やすい」46.0%，「・・良い」30.6%，「良い」29.8%，「便利」13.7%，等の肯定的な用語がある一方で，「大変」24.2%，「不自由」15.3%，「困る」12.9%，「・・にくい」8.9%，といった否定的な側面に関する用語も用いられている。

そのほか，よく用いられていた用語としては，「体験」が28.2%と多い。ビデオには疑似体験の映像があることから，それらに関する記述が多いと思われる。また，「自分」が24.2%あり，自分に結びつけて，身近な問題として考えていることがわかる。

(2) 文意による分類と傾向

感想文の記述内容を，KJ 法を用いて整理したものが，図1である。その内容は，大きく四つのグループに分けられる。第1グループ（a ～ g）は，ビデオの視聴を通じて「知ったこと」等が書かれている。また，それらを通じて考えた「ビデオに対する評価」についてもここに含めて考える。第2グループ（h ～ j）は，ビデオの視聴を通じて気付いた「様々な課題」に関する記述である。第3グループ（k ～ m）は，今後，「自分自身で取り組んでみたい事柄」について記載されている。さらに第4グループ（n ～ p）は，「周囲の人々や社会への要望」が書かれている。

次にこれらの四つのグループの記述の内容について，さらに具体的に見て行く（表4）。

第1グループの，「知った」「今までは知らなかった」「わかった」「勉強になった」「参考になった」「思い出した」とされる事柄の内容をまとめると，大きくは，物的側面に関することと，人的側面に関することがある。物的側面については，「a. 生活用品・駅・住宅・施設等のバリアフリー・ユニバーサルデザインの内容を知ることができた」（66.9%）という感想にまとめられ，「道具から住宅，駅，車両，施設，街全体に至るまで，様々なレベルのバリアフリーやユニバーサルデザインについて知ることができた」，さらには，「バリアフリーとユニバーサルデザインの違いが理解できた」とされている。人的側面については，「b. 高齢者・障がい者の生活や手助けの方法を知ることができた」（56.5%）にまとめられる。これは，a の物的側面と深く関わるものもあり，たとえば，「点字ブロックの上に物を置くと邪魔になる」ことや，「視覚障がいのある人にお茶を出す時には冷たいか温かいかを伝えることも大切」なこと等，日頃の生活での配慮について，学んだことを記述している。

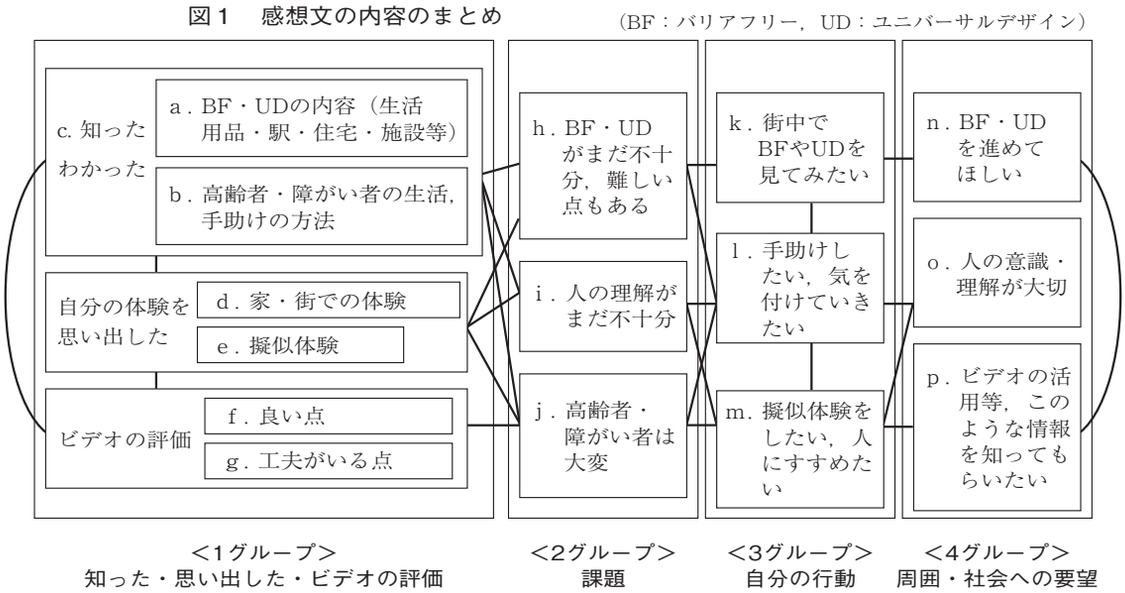
「自分の体験を思い出した」グループでは，「d. 家・街での体験」（33.9%）として，祖父や祖母等の家族を介護した体験や，自分自身の障がいのこと，街中で障がいのある人と出会ったこと等を紹介している。「e. 自分の疑似体験の経験」（11.3%）の記述では，「大変だった」ことや，「視点が変わり良い経験になった」ことを改めて考え直している。

「ビデオの評価」に関する記述では，「f. 良い点」（33.9%）として，「子どもが見ても分かりやすい」，「市内の様子が紹介されていて身近に感じられる」，「視覚障がい者へのインタビューがある」こと等が良いとされている。一方で，「g. 工夫すると良い点」（2.4%）として，「クイズの内容が簡単すぎる」ことがあげられている。

第2グループは，「福祉のまちづくりに関する課題」につ

図1　感想文の内容のまとめ

（BF：バリアフリー，UD：ユニバーサルデザイン）



いての記述であるが，これらも物的側面と人的側面に分けて整理できる。物的側面については，「h．バリアフリーやユニバーサルデザインがまだ不十分なところや，実現には難しい点もある」（29.0％）という内容にまとめられる。難しい点として，点字ブロックは視覚障がいの人にとっては必要だが車いす利用者には不便なことをビデオの中で示したが，その例をあげて，「解決が難しい事柄もある」ことを示している。人的側面に関する課題としては，「i．人の理解がまだ不十分」（11.3％）なことをあげており，「街中で障がい者の人が冷たい言葉をかけられた場面」等が紹介されていた。そして，物的側面や人的側面の課題や，疑似体験での実感等を踏まえて，「j．高齢者・障がい者は大変」（25.0％）ということに共感している。

第３グループは，「自分自身で取り組んでみたい事柄」についての記載であり，これについても物的側面と人的側面の二つに分けることができる。物的側面に関することとしては，「k．街中で，バリアフリーやユニバーサルデザインを見てみたい」（10.5％）と考えており，このビデオがきっかけで，「身近なところをバリアフリーやユニバーサルデザインを意識しながら見直してみたい」，「福祉の勉強を深めたい」と考えるようになっている。人的側面に関することでは，自らが積極的に，「l．手助けしたい，気を付けていきたい」（32.3％）といった意識が芽生えている。そして疑似体験について，自分でも，「m．疑似体験をしてみたい，他の人にも疑似体験を勧めていきたい」（16.1％）と考えている。疑似体験については，「人は自分が実際に経験しないと，物の不便さ等に気付かない」と，体験による効果を肯定的に捉えている。

第４グループでは，「周囲の人々や社会への要望」が記述されており，やはり物的・人的の二面の側面に分けて考えられる。物的側面の記述は，「n．バリアフリー・ユニバーサルデザインを進めてほしい」（33.1％）という内容にまとめられる。たとえば，「高齢者や障がい者が気軽に外出できる街になってほしい」「どんな人でも住みやすく生活しやすい街になってほしい」等，さまざまな人にとって住みやすい街づくりを願っている。人的側面については，「o．人の意識・理解が大切」（28.2％）にまとめられる。ビデオでは最後に，「人の目と心がバリアをなくす」という，視覚障がい者の言葉を紹介しているが，この言葉を引用して，「最後に出てきた『人の目と心がバリアをなくす』という言葉を聞いて，一人一人の意識でもっともっと暮らしやすい街に変われると思った」といった記述も見られた。このように，物的配慮や人の理解を推進するために，他の人にもビデオのような内容を学んでもらいたいと考えており，「p．ビデオを活用する等して，このような情報を知ってもらいたい」（6.5％）という，啓発活動を勧める記載も見られた。

(3) コース・学年別の感想の特徴

コース・学年別に感想の内容をまとめたものが，表４である。全体平均と比べて，違いが顕著なものを太字で記した。コース・学年別の傾向を見ると，社会福祉コース４年生は，「d．家や街での自分の体験を思い出した」とする人が少なく，「f．ビデオの良い点」について記述した人が多かった。社会福祉コースの４年生は，福祉分野の講義や実習等を通じて，類似する内容についてすでに多くを学んでいることから，改めて自分の体験を振り返り，思い出すと

表４　コース別の感想の内容　（単位：人，下段は％）

	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p
社会福祉	24	15	6	3	1	**19**	0	5	3	0	4	5	1	8	4	4
4年生(36)	66.7	41.7	16.7	8.3	2.8	**52.8**	0.0	13.9	8.3	0.0	11.1	13.9	2.8	22.2	11.1	11.1
社会福祉	21	15	3	10	3	11	0	8	4	8	6	9	4	8	7	1
3年生(29)	72.4	51.7	10.3	34.5	10.3	37.9	0.0	27.6	13.8	27.6	20.7	31.0	13.8	27.6	24.1	3.4
児童心理	4	2	0	**3**	0	0	0	2	0	0	1	1	0	**3**	0	0
3年生(5)	80.0	40.0	0.0	**60.0**	0.0	0.0	0.0	40.0	0.0	0.0	20.0	20.0	0.0	**60.0**	0.0	0.0
児童心理	18	**22**	2	**17**	5	4	0	**15**	5	**18**	2	**18**	5	**16**	**17**	2
1年生(28)	64.3	**78.6**	7.1	**60.7**	17.9	14.3	0.0	**53.6**	17.9	**64.3**	7.1	**60.7**	17.9	**57.1**	**60.7**	7.1
生活文化	7	6	0	4	3	1	1	3	2	**5**	0	0	**4**	**5**	4	1
3年生(9)	77.8	66.7	0.0	44.4	33.3	11.1	11.1	33.3	22.2	**55.6**	0.0	0.0	**44.4**	**55.6**	44.4	11.1
その他	9	8	3	5	2	7	2	3	0	0	2	7	6	1	3	0
(17)	52.9	47.1	17.6	29.4	11.8	41.2	11.8	17.6	0.0	0.0	11.8	41.2	35.3	5.9	17.6	0.0
全体	83	70	14	42	14	42	3	36	14	31	15	40	20	41	35	8
(124)	66.9	56.5	11.3	33.9	11.3	33.9	2.4	29.0	11.3	25.0	10.5	32.3	16.1	33.1	28.2	6.5

注）項目ａ～ｐは図１を参照

いうよりも，大学が作成したビデオの内容を評価する立場でビデオを見ていることがわかる。次に，児童心理コース1年生については，どの学生も，数多くの気付きを記述しており，自分の体験を思い出したり，ユニバーサルデザインやバリアフリーに関する新しい知識を身に付けたことがうかがえる。また，「j. 高齢者・障がい者は大変」ということを多くの学生が感じ取っている。

5. 考察

先述した，学習者の変化・変容を把握する際の８項目[4]（①興味や関心の喚起・拡大，②知識や理解の拡大・深化，③意識や意欲の形成・変革，④態度や行動の形成・変容，⑤技術や技能の取得・向上，⑥思考力や論理力の獲得・伸長，⑦学習者相互の意思疎通や友好関係の促進・深化，⑧学習成果の日常生活への具体化・実践化）を踏まえて，今回の結果を考察する。

感想文の記述内容について，用いられた用語の出現回数を見ると，理解や知識の習得に関する用語が多く，「バリアフリー」「ユニバーサルデザイン」「障がい者」等について，知識を身に付けたり，理解が進んだことがうかがえた。これは，「②知識や理解の拡大・深化」，の項目に該当すると考えられる。

次に，KJ 法による感想文の分析結果をまとめると，ビデオを視聴した感想が大きく四つのグループに分けられた。これらを繋げてみると，「バリアフリーのまちづくりの状況や障がい者等の気持ちや生活を知る→現存する課題に気付く→自分でできることを考えてやってみる→社会の進むべき方向や人々がとるべき行動を考える」，といった流れで，自分や社会のあり方を考えることに繋がっていることがわかる。先の分類の番号をあてはめてみると，「バリアフリーのまちづくりの状況や障がい者等の気持ちや生活を知る②⑤→現存する課題に気付く⑥→自分でできることを考えてやってみる①③④⑦⑧→社会の進むべき方向や人々がとるべき行動を考える⑦⑧」と考えられ，さらに，「⑥思考力や論理力の獲得・伸長」は，視聴した内容を振り返り，感想を書いたりする一連の流れの中で一層，身についているものと考えられる。

福祉教育の目的は，単に知識を身に付けるだけでなく，最終的には，「⑧学習成果を日常生活に具体化･実践化」すること，つまり，福祉のまちづくりの推進のために自分でできることを考えてもらうことにある。「親子 UD ビデオ」の視聴により，積極的に関わる意識が生まれていることは，まさに福祉教育の目的に適っていると言える。

ビデオでは，前半はバリアフリーや視覚障がい者の生活に関する知識を身につける内容であるが，後半に，市民が自分たちで街を点検したり，児童が困っている人のお手伝いをする場面を挿入している。これらの場面を挿入したことも，自分の生活や身近な街を振り返るきっかけになっていると思われる。

今回の分析を通じて改めて確認できたことに，「体験」の重要性がある。ビデオを見ることで，多くの学生が自分の体験を振り返り，障がい者や高齢者の気持ちや生活を思いやっている。疑似体験についても，体験したことのある学生は，その時の体験を思い出したり，「他の人にも体験してほしい」と考えており，体験したことのない学生は，自分でも「ぜひ体験したい」と考えている。疑似体験はバリアフリーのまちづくりを考えたり，障がい者等の気持ちや生活を理解する上で有効で，疑似体験の映像を見るだけでも，自己の生活を振り返り，障がい者の生活の理解に繋がることが伺える。

そのほか，自らの障がい体験を記した学生がいた。この学生は，自分自身が目の病気のために，将来失明することを宣告されていると記述していた。しかし，視覚障がい者へのインタビューの様子を見て，「思ったよりも普通そうにしていてビックリした。（私は今からビクビクしていますが・・・）五感のうち視覚は生活する中で大きいと思っているので，どうしているのか知りたかったので，このビデオを見られて良かった。」と感想を述べていた。障がいのある人は，生活する上で大変な部分もあるが，工夫をすることで，いきいきと，ごく普通の生活を送れる。この事実も多くの人に伝えていくべき事柄であろう。これは，もしも自分自身が同じ立場に立った場合に大きな心の支えとなり，まさに生きる力を学ぶことに繋がっていると考えられる。

6. おわりに

本稿では，福祉教育用ビデオ「親子で学ぼうユニバーサルデザイン」の本学学生への視聴を通じて，その教育効果を把握した。その結果，バリアフリー・ユニバーサルデザインのまちづくりや障がい者等の生活に関する知識を身につけることができ，現在の課題を見つめてさらに自分にできることを考える，といった意識が生じていることが把握された。まち点検や疑似体験，障がいのある人へのインタビューといった直接的な体験を補うものとして，それらを映像化したビデオの視聴も有効であった。

今回は対象が大学生に限られており，今後はさらに，幅広い年齢層に視聴してもらうことで，年齢による気付きの差異を把握し，年齢に応じた福祉教育のあり方について検討を進めたい。また，感想文の分析からは，必ずしもその

学生の理解の全体像の把握できないため，総合的に理解度を把握する工夫を考える必要がある。これに加えて，ビデオの視聴による理解をさらに深めるための，教員からの問いかけの仕方やワークシートのあり方等についても検討を加えていきたい。

＜引用文献・参考文献＞

１）野村歓,「福祉のまちづくり概論」，リハビリテーション研究第 80 号，（財）日本障害者リハビリテーション協会，平成 6 年 6 月，pp.2-10

２）「高齢者，障害者等の移動等の円滑化の促進に関する法律」（平成 18 年 6 月 21 日法律第 91 号）第七条　国民の責務として，「国民は，高齢者，障害者等の自立した日常生活及び社会生活を確保することの重要性について理解を深めるとともに，これらの者の円滑な移動及び施設の利用を確保するために協力するよう努めなければならない。」と明記されている。

３）「バリアフリー・ユニバーサルデザイン推進要綱～国民一人ひとりが自立しつつ互いに支え合う共生社会の実現を目指して～」（平成 20 年 3 月 28 日）バリアフリー・ユニバーサルデザインの推進に関する政府の基本的な方針として，バリアフリーに関する関係閣僚会議において決定されたもの。心のバリアフリーの重要性を指摘している。

４）阪野貢,「市民福祉教育の探究－歴史・理論・実践」，㈱みらい，平成 21 年 10 月，pp.191-195

５）伊藤篤,「福祉教育・ボランティア学習における評価手法の基礎的検討」，『日本福祉教育・ボランティア学習学会年報　福祉教育・ボランティア学習の評価』，平成 19 年 11 月，p.33

６）日本福祉教育・ボランティア学習学会年報　福祉教育・ボランティア学習の評価，平成 19 年 11 月

７）根津朋実,「カリキュラム評価研究の立場から見た福祉教育・ボランティア学習の評価」，『日本福祉教育・ボランティア学習学会年報　福祉教育・ボランティア学習の評価』，平成 19 年 11 月，pp.12-29

８）成瀬光一，大倉正成，蓑輪裕子，長田由紀子，横井雅代，大根静香，亀崎路子,「障がい児を持つ親の子育て支援に関する研究－『親と子で学ぶユニバーサルデザイン』ビデオの作成と『障害児の親から学ぶ講座』による教育効果の把握－」，連鎖的参画による子育てのまちづくりに関する開発的研究　平成 17・18 年度研究集録，平成 19 年，pp.61-65

９）蓑輪裕子，成瀬光一，大倉正成，長田由紀子，横井雅代，大根静香，亀崎路子,「障がい児を持つ親の子育て支援に関する研究－福祉教育の実践を通じて－」，連鎖的参画による子育てのまちづくりに関する開発的研究　平成 17 年～ 21 年度研究集録，平成 22 年 3 月，pp.147-158

10）KH　Coder　樋口耕一による計量テキスト分析のためのフリー・ソフト
http://khc.sourceforge.net/

11）川喜田二郎,「発想法」，昭和 42 年,「続発想法」，昭和 45 年，いずれも中公新書

12）障害者白書，平成 13 年版～平成 21 年版，内閣府

13）内閣府障害者施策推進本部,「公共サービス窓口における配慮マニュアル - 障害のある方に対する心の身だしなみ -」，平成 17 年，http://www8.cao.go.jp/shougai/manual.html

14）国土交通省,「子どもと学ぶバリアフリー～『バリアフリー教室』の進め～」，平成 21 年，
http://www.mlit.go.jp/barrierfree/transport-bf/others/kodomobfpamph.pdf

15）高橋友三他，福祉のまちづくりを担う人材育成について－岩手県における人材育成の実践事例から－，日本福祉のまちづくり学会第 7 回全国大会概要集，pp.99-102，平成 16 年

16）中野泰志他，まちづくりにおける「障害当事者とのまち歩き」と「障害疑似体験」の意義－多様な人の住まう「まち」への気づきを目指して－，日本福祉のまちづくり学会第 7 回全国大会概要集，pp.281-284，平成 16 年